

## ■■ 古真立の「みこ」の面 ■■



第67図 古真立の面，左より「婆」「みこ」「爺」

前編「花祭り」の条に、古真立の「みこ」の面に、眼孔がないと言ったが、そのことについて改めて補正する必要がある。じつはその面の写真を撮影すべく、出版も迫った本年（昭和五年）一月八日に、古真立を訪れて、氏子総代の方に依頼して、撮影をしようとして手に取ると、立派に二つの眼孔がある。これはまたどうしたわけかと、だんだん訊ねてみたが要領を得ない。この仮面には眼孔はなかったはずである。不用

意と言えはそれに違いないが、この仮面に眼孔のないことは、立派な事実だったわけである。それでかく信ずるに至った事情を一通り言って改めて訂正する。昭和三年一月一〇日であった。折口信夫さん、西角井正慶さんと三人で、同所の祭りを見学に行った。折柄の豪雨の中を暮れ方になってかねて見知りごしの鈴木右一郎氏の宅に辿りついて、さて一応座敷に案内され、炬燵に入れていただいて、濡れた服を乾かしながら、応対に出られた土地の人々からいろいろ行事に対する説明を聴いているうち、話がたまたま「みこ」の舞いに至ったとき、主として対応して下すった字小谷下の某氏（氏名を逸す）が「なにぶんみこの面形には目がないので舞いにくい」と語られた。私はその前から、他の土地の「みこ」の面に眼孔の小さいことに注意を傾けていた際であり、その時の一言は強く胸に応えたのである。それで本当に孔がありませんかと念を押したところ、傍らに居合わせた二、三人の人々も、ことごとく肯かれたので、すっかりそう信じてしまった。その時なお念のために、手にでも取って見れば問題はなかったのだが、実を言うと行事の気分を尊重する気持ちから、床の間に飾ってある面に、まして神事の前にいちいち手など触れることは慎んでいたもので、面拝見にわざわざ前に立ったのだが、それまではあえてしなかったのである。しかも舞いに掛かってからは、そうしたことはわかりようはない。舞振りはどこまでも盲目であるのだから、このことはけっして申し訳の繰り言ではない。

そんなわけで、じつは写真を撮りかけて、さらにどうした間違いかを訊ねてみたが要領を得ぬ。その人たちも案外のような顔付きである。昔の面にはなかったとも、あるいは孔はあるが、事実目の位置が異なっているため、かぶった場合は盲目と変わりはないとも言う。これは氏子総代の方の言であった。また一人は後に開けたとも言うておられたが、孔

の様子からは、必ずしもそうとは決められぬ。いずれにしてもあるもののない証明にはならぬ。

そうしたいろいろの説明を聞いて、私は次のような結論を得た。それは現在の面には眼孔はあるが、以前のもの——あるいは一般「みこ」の面には眼がないとする伝承から、ほんとの盲目的に、「みこ」の面には眼孔がないものと、村の人自身で決めている。そうして一方村の中でも、役に当たるものと、一方神部屋を預る部屋番以外のものは、面にはほとんど手を触れることはないのだから、そうした伝承が、何らくつがえることなく生きていたのであろうと、これは全然根拠のない想像ではない。たとえば青少年の舞にしても、四方に行くとして五方行くものは、いかなる場合でも四方と信じていたたぐいである。したがってこの事実は、私自身としては宜い経験であった。伝承と実際とがもつれてゆくことは、充分考えに入れる必要が生じてくるわけだ。そうして一方この記録にしても、真相に触れてる点は、どこまでであるかも気にする所以である。これが眼孔というような、見ればわかりきった問題であるから明瞭であるが、形のないものになると、その限界を知ることは容易ではないのである。

しかし余事は措いて、ないとしたものが事実存在したのであるから、この点を改正しておきたい。

なお「みこ」の面は、大きさ天地五寸四分あり、裏に、

白川氏願宅塗之 吉田宿小野田直吉

とある。吉田宿は今の豊橋である。